

天地創造

合唱団鯨演奏会



訳／合唱団鯨＋芥川也寸志

ハイドン
天地創造

1970・7・1 (水) PM. 6:30 開演

渋谷公会堂

独唱

小池容子

金谷良三

松尾篤興

演出

平井靖人

竹邑類

大野晃

美術

川島義雄

田代洋子

関根憲一

音響

溪正樹

出演

田村智章

福島晶子

西田清志

山城賢士

指揮 芥川也寸志

演奏 合唱団鯨

新交響楽団

チェンバロ

渡部令子

岡部行宏

「わかりやすいオラトリオ」をめざして、合唱団〈鯨〉はハイドン〈四季〉 ヘンデル〈メサイア〉 を上演し、今回ハイドンの〈天地創造〉 に取り組みました。

これらの名作は、いずれもキリスト教における神への信仰心と、音楽における創造的情念との結びつきの中から生れたものであり、本来この曲の演奏には、それと同化し得る信仰心、もしくは体験的理解が不可欠のように思えます。例えば、AMEN という言葉が、何の感情的表現をも持たずに歌われるということは、あり得ないのです。

またこれらの名作は、いずれも具体的な概念を示すテキストに基づいて作曲されたものであり、たとえそのテキストが充分考慮された日本語に置きかえられたとしても、原語の持つニュアンスを伝えることは到底不可能であります。例えば創造第一日で、まず神は光を創り、それを受けて Und Gott sah das Licht, daß es gut war とウリエルが歌うときから、もう私たちは絶望の淵に追いやられてしまうのです。

■ 私たちがこれらの名作を上演しようと思うとき、その前にたちふさがる難関はまだまだほかにもたくさんあります。それにもかかわらず、私たちがあえてこれらのオラトリオを上演したいという気持ちに駆られるのは、やはり名作たる所以ともいふべき音楽的説得力に負けるからであり、その中に身をなげたいという欲望をおさえられないからです。

つまり私たちの〈天地創造〉は、宗教的情念や詩的冥想の多分に入りまじったハイドン自身の脳裏にあった〈天地創

造〉とは、ずいぶん違うものになっているのでしょうか。しかし、だからといって、例えば、全曲を忠実に原語で歌ったとしても、それでハイドンに近づいたことには無論なりません。宗教観の違うという問題は尚更のことで、一夜づけの聖書の勉強が、どれほど歌の音楽的内容を変えることが出来ましょう。ですから私たちにのこされた方法は、ただこの音楽の中に身をなげたいという、その単純な気持を持ちつづけること以外にはないように思われます。

ただしく天地創造〉は単なる合唱曲でもなく、合唱付シンフォニーでもなく、まさしくオラトリオなので、私たちが流儀で如何にオラトリオの形式を完結させるかが問題です。ここに、平井靖人さんをはじめとするスタッフの方々の協力がどうしても必要になりました。みなさんは私たちの仲間に加わって下さり、現代、この日本で、私たちによって如何にハイドンを蘇がえらせることが出来るかを、何度にもわたって相談を繰り返して、今日のこの舞台を作って下さいました。スタッフ、キャストの方々に深く感謝するとともに、少しでもこの私たちの意欲をお汲みとり頂けましたら望外の幸です。

尚、オーケストラは〈メサイア〉にひきつづいて全員アマチュアの新交響楽団であり、この点でも一つの成果をお見せすることが出来ると思います。私たちが単なる趣味のグループではないことがわかって頂けましたら、これも望外の幸といわなければなりません。

プロフィール



指揮 芥川也寸志

東京音楽学校研究科作曲科卒業。

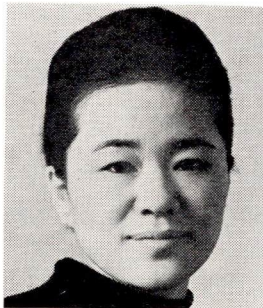
代表作に、ニューヨークで初演された「弦楽のための三楽章」、ザルツブルグオペラ祭受賞作「ヒロシマのオルフェ」、最近作、舞踊音楽「蜘蛛の糸」(1970年イタリア賞参加作)、「チェロ協奏曲」などがあり、合唱の作品は、東京混声合唱団の委嘱曲「お天とうさま・ネコ・プラタナス・ぼく」(1964年)など。合唱団鯨の育成とともに、新しいユニークな合唱団の生み出されることが期待されている。

ソプラノ 小池容子

東京芸術大学声楽科卒業。同専攻科修了。二期会会員。蘭田誠一、渡辺高之助に師事。関種子、上浪明子に師事。在学中、芸大オペラ「ラ・ボエーム」のミミを演じて注目された。

ヘンデルの「メサイア」、モーツァルトの「載冠ミサ」、ベートーヴェンの「C-durミサ」、「グロリア」、など宗教曲の他に、オペラでも「ラインの黄金」のボークリンデ、「魔笛」の童子「コーヒー・カンタータ」の娘などを演じて好評を博している。

鯨との共演は、「メサイア」について2作目。

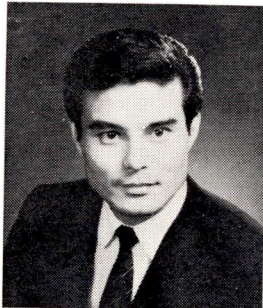


テノール 金谷良三

東京芸術大学声楽科卒業。蘭田誠一、渡辺高之助に師事。東京混声合唱団創立以来中心的メンバーとして活躍している。

岩城宏之、小沢征爾、若杉弘などとN響、日フィルなどで共演。スピントテナーの声質と演技力は高く評価され、NHK創作歌劇のタベや都民劇場、藤原歌劇団公演に参加する一方、ヘンデルの「メサイア」、ハイドンの「四季」、バッハの「ヨハネ受難曲」など、宗教曲にもレパートリーは広い。

鯨との共演は、4作目。

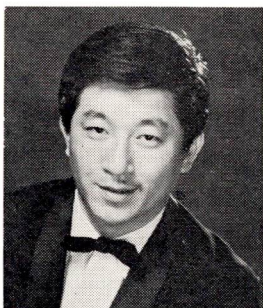


バリトン 松尾篤興

東京芸術大学声楽科卒業。渡辺高之助に師事、二期会研究生7期生卒業公演オペラ「マルタ」のトリスタンでデビューし注目された。二期会会員。

「バスチェンとバスチェンネ」のコーラス、「電話」のベン、「ドン・ジョバンニ」のマゼット、「カルメン」のダンカイロなど多くのオペラに出演し、宗教曲やポピュラーな曲など多方面で活躍する一方、洗足学園大学で教鞭をとり若い人の育成にあたっている。

鯨との共演は、「メサイア」について2作目。

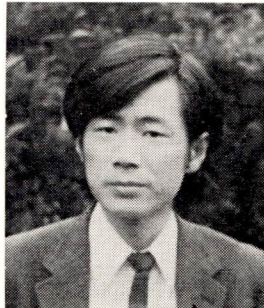


演出 平井靖人

青山学院大学法学部卒業。在学中から舞台に関心をもち、「三つの小さなミュージカル」の演出でデビュー。日生劇場に所属する若手演出家。

明治100年記念音楽祭(名古屋市主催)山本純徳指揮「新世界」ではジャズコンボや映写装置を取り入れ、各楽章ごとに新しい演奏形式をもちこんだユニークな演出を試みて注目された。

鯨での演出は、「四季」「メサイア」について3作目。'70年代の「天地創造」の表現に意欲を燃やしている。



アダム 田村智章

桐朋学園演劇科卒業。現在、専攻科在学中。

ピーターズ・スーパー・カムパニーに所属し、ダンスのレッスンを受ける一方、演技の研究を続けている。

安部公房作「ミュージカル・可愛い女」、シェイクスピア作「マクベス」、バッハ作「コーヒー・カンタータ」、ピーターズ・スーパー・カムパニー浴場公演 竹邑類作「日蔭の花」などに出演し、その特異な個性が注目されている。

イヴ 福島晶子

日本大学芸術学部写真学科卒業。

日本唯一の、男性専門のカメラマンとして著名であるが、女優としても「幻想小僧・風の冒険」の女神役 カプセルショウ「Hey Happy girl」のエトワール役で出演した。

さまざまなジャンルにわたって、自己表現を試み、人間の可能性を追求している。小説の創作にも意欲を燃やしており、今秋刊行の予定。今後多方面にわたる活躍が期待されている。

出演 西田清志

桐朋学園演劇科卒業。専攻科在学中。

ピーターズ・スーパー・カムパニーに所属して、ダンスや演技の研究を続けている。

シェイクスピア作「リア王」、ブレヒト作「カラールおっかあの銃」、安部公房作「ミュージカル・可愛い女」、ピーターズ・スーパー・カムパニー浴場公演・竹邑類作「日蔭の花」などに出演。すぐれた演技力をもった貴重な存在として期待されている。

出演 山城賢士

桐朋学園演劇科卒業。

ピーターズ・スーパー・カムパニーに所属し、ダンスのレッスンに励む一方、演技の訓練も受けている。

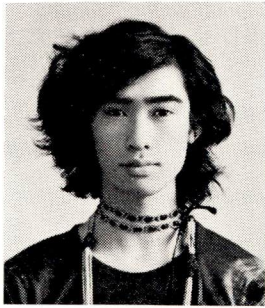
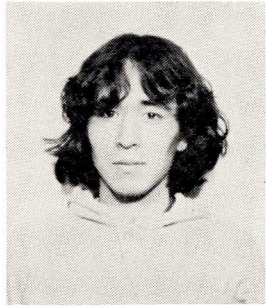
竹邑類作、ピーターズ・スーパー・カムパニー公演「幻想小僧・風の冒険」、バッハ作「コーヒー・カンタータ」、ピーターズ・スーパー・カムパニー浴場公演・竹邑類作「日蔭の花」などに出演。巾広い演技力に、今後の活躍が期待されている。

出演 岡部行宏

伊藤道郎舞踊研究所附属俳優養成所を経て大船撮影所入社。現在フリー。

シュニー・パルミサノ、トーマス・モリナロ両氏にモダンダンスを師事。歌えて踊れて演技のできる役者として、貴重な存在であり、今後の日本のミュージカルでの活躍が期待されている新人のひとり。

主な出演作品「ノーストリングス」、「ラ・マンチャの男」(東京公演4~5月)のほか、多くの舞台、TV映画などで活躍している。



第一部

1 レシタティーヴと合唱

ラファエル

はじめに 神は天地を創る
大地は姿もなく
闇はあたりを一面に支配していた

合唱

水面に漂う神の霊は告げた
光よ 現れよ！
光は射す

ウリエル

神は光を認めて
光は分けられた 暗闇から

2 アリアと合唱

ウリエル

清らかな光の前に
暗く無気味な闇はあせて
清らかな光は 恐しい闇を消した
はじまりの日は明けていった
乱れた闇の夜は治められ
明るく正しい神の世界は
いま開けゆく
地獄の世の霊たちは
深い果てしない闇の底へと
恐れおののき落ちてゆく

合唱

恐れと怒りは 彼らと共に消える
神の言葉で 新しい世界
いま生まれ開けゆく

3 レシタティーヴ

ラファエル

神は まず空を創った後
空の上の水と
その下の水とを分ける
そしてその後は 嵐が吹きすさび
雲はちぎれ 大空に舞う
稲妻空を裂き 雷とどろきわたる
雨は激しく降り 水は大地を洗う
ひょうは大地をたたき
雪は舞い落ちる

4 独唱と合唱

ガブリエル

たたえよ 神の御業を！
天使たちの驚きの声 空高く
響きわたる
わが神に栄えあれ！
おごそかに二日目は開けゆく

合唱

空高く響きわたる

わが神に栄えあれ！

おごそかに二日目は開けゆく

ガブリエル

空高く響く天使たちの歌声
さあ 二日目となる
神の業をほめたたえよ！

合唱

さあ 二日目となる
神の業をほめたたえよ！

5 レシタティーヴ

ラファエル

神は語る
空の下の水は一つに集まり
乾いた土よ 現われよと
神は それを陸と名づけ
水の集まりを 神は海と名づける

6 アリア

ラファエル

大波はさか巻き 海はたけり狂う
白く波は碎けて泡立ち
海は荒れ狂う
岩山現われて 峰は高くそびえる
雲を突き そびえ立つ
天に向かい そびえ立つ

平野は広がり
河は豊かに流れゆく
水をたたえ
河は豊かに流れゆく
清らかな流れは谷間を分けてゆく
ひそやかにざわめいて
せせらぎは流れゆく

7 レシタティーヴ

ガブリエル

神は語る
大地には若草萌え
草は種を持ち
木々は花開き 実を結べ
大地には緑生い茂れ

8 アリア

ガブリエル

野辺には
さわやかに柔らかな緑萌え
花は かぐわしくうるわしく
咲き乱れる
すばらしいこの眺め
若草の香り
あたりに立ちこめ
葉草も芽生え

ああ 柔らかな若草の香り
風に漂う
豊かな実りに枝はたわみ
繁る木立 陽をさえぎり
緑の森は深く山を包む

9 レシタティーヴ

ウリエル

このように天使らは三日目を語り
神をたたえる

10 合唱

たて琴をかき鳴らせ！
高らかにたたえよう
神の力をたたえよう！
大地と空を描く はえある神を
たたえよう

11 レシタティーヴ

ウリエル

神は語る
大空に 光現われよ
星と夜に分かれて
光は大地を照らし
季節と月日を示す しるしとなれ
星よ きらめけ

12 レシタティーヴ

ウリエル

光あふれ 太陽は高く昇る
そのりりしき姿は花むこにも似て
雄々しく輝く
ひそやかに 蒼い光で
月は夜を静かに包む
果てしなき夜空に
星はまばゆく輝き
天使の歌は 神の力をたたえ
声高らかに四日目を告げ響く

13 合唱と三重唱

合唱

空は告げる 神の誉れ
空は示す 神の業を

ガブリエル、ウリエル、ラファエル

この日 言葉をかの日々に伝え
この夜 人の知恵を
あの夜に伝える
その響き その言葉
地の果てにもゆきわたる
地の果てにあまねく及ぶ

第二部

14 レシタティーヴ

ガブリエル

神は語る
水の中には 生きるものが
群れをなして泳げよ
鳥は大地から舞い上がり
天に向かって飛べと

15 アリア

ガブリエル

力強くはばたきながら
荒わしは飛ぶ
大空の太陽に向かい あま駆ける
さえずる声もかるく
ひばりは楽しく歌う
雄ばとと雌ばとは
やさしい声で愛をささやく
森や繁みに鳴くうぐいすの
あまい声響く
悩みも胸になく
悲しみも知らないで
やさしい歌をかるやかに歌う

16 レシタティーヴ

ラファエル

神は 大きな鯨と
すべての生けるものを造り

祝福して語る

すべてのもの 増えよ！

空飛ぶ鳥よ増えよ 梢で歌えよ！

増えよ 水に棲むすべての魚よ！

産めよ 地を満たせ！

神に感謝をしてたたえよ！

17 レシタティーヴ

ラファエル

天使たちは 琴をかなでて
神の奇跡 五日目をほめ歌う

18 三重唱

ガブリエル

柔らかに緑波うつ
若草萌える美しい丘
細い谷間 湧いて流れる
清らかな冷たい小川

ウリエル

広い空に輪を描いて
鳥の群れは楽しげに舞う
鳥の翼は太陽の陽を浴びて
まばゆく光輝く

ラファエル

清らかな水には
群れなす魚 泳ぎまわり
銀色に輝く

広い海の深い底から波をかき分け

大きな鯨 おどり出る

ガブリエル、ウリエル、ラファエル

なんと限りもない神の力と業よ！

神の力を誰が量れよう？

19 三重唱と合唱

ガブリエル、ウリエル、ラファエル

合唱

たたえよ

偉大な神の力をほめたたたえよ

限りなくほめたたたえよ

20 レシタティーヴ

ラファエル

神は語る
地上の生物は
我に従いて 現われよ
地をはうものと家畜とけものと
現われよ

21 レシタティーヴ

ラファエル

神は大地を開き その言葉どおり
数も知れぬ生き物を創る
勇みたち 吠えるライオン
すばやくトラがおどり出る

雄鹿は角をもたげる
たて髪ふり馬は勇ましくいなく
牛の群れは 草原で草を食べる
たくさんの羊の群れで
牧場はおおわれ
砂のように群れなす虫が
うず巻いて飛ぶ
地の上をはうへび

22 アリア

ラファエル

いま天は輝き光る
大地は装飾
空を飛ぶ鳥の群れ
水にあふれる魚の群れ
大地では
けものが群れをなして歩く
だが 神の業はただ一つ残る
神の業をたたえ感謝をささげる
すばらしい生きものが残る

23 レシタティーヴ

ウリエル

そこで神は
自分の姿に人間を形造り
男と女に分けて
命の息を吹き入れ

人ははじめて息づく

24 アリア

ウリエル

けだかく清く 知恵と力あふれ
うるわしいその姿 自然の王者
広いその額は知恵あふれたしるし
輝く彼のひとみは
神の息吹きと力あふれる
彼のために この世に
神の手で創られた
やさしく愛らしい妻は
彼に寄りそい
花のようなほほえみは
うるわしい春のよう
喜びと幸せと愛を歌う

25 レシタティーヴ

ラファエル

神は 生まれ出たすべてのものに
恵みを与え
天使たちは 六日目の終わりを
高らかにほめたたえる

26 合唱

神はついに遂げた
われらが神を歌いあげよう

高らかにたたえよう
喜びの声高く響かせよう！
たたえよ
神の業をほめたたえよ！

27 三重唱

ガブリエル、ウリエル

すべてのものは
神に糧を乞い求める
神は豊かに与えて
みな 満ち足りる

ラファエル

神が顔をそむければ
みな 恐れおののく

ガブリエル、ウリエル、ラファエル

息を絶てば
みな ちりと消える
神が息を吹けば 命はよみがえり
地には喜びと力 満ちあふれる

28 合唱

神はついに遂げた
われらが神を歌いあげよう
高らかにたたえよう！
いつまでも
われらが神をたたえよう！
神の名に いつまでも栄えあれ！
アレルヤ！

第三部

29 レシタティーヴ

ウリエル

ばら色の雲に
清らかな朝の調べ 響きわたる
空のかなたより
天の調べは地に流れる
見よ！ 手を取り歩く二人を
二人の眼にあふれる感謝の光
神の力をほめたたえよ
さあ みんなで共に歌おう！

30 二重唱と合唱

アダム、エバ

ああ 神よ
天地には恵みがいっぱい
大きな世界
すばらしい神の世界
すばらしい
神の成した偉大なるこの世界

合唱

神の力を
変わることなく皆ほめたたえよ

アダム

美しい星 ほほえむ夜明けよ
太陽の光は いま輝く
太陽はすべてのものの魂

合唱

さあ 進みゆく道で
神の力と誉れを伝えよ！

エバ

静かに夜を飾る星たちよ
さあ
くまなく神の誉れを歌い広めよ！
いたるところに

アダム

神の力尽きず
新しい力産み出す
立ちこめる霧よ 霞よ
風になびくものよ

アダム、エバ、合唱

神をほめたたえよ！
高らかにたたえよ！
尊きその名を 尊き力を

エバ

泉よ

清らかな音響かせよ！

木々よ
梢を垂れて神をあがめよ！
草花よ

かぐわしく咲き香れ！
山にのぼるもの 地をはうもの
空高く飛ぶ鳥 水に泳ぐもの

合唱

さあみな 神をほめよ！
たたえよう

アダム、エバ

森に丘に谷間に
感謝の歌は
朝から日暮れまで駆けめぐる

合唱

ああ神に幸あれ！
神の言葉により世界は生まれた
天地は神をあがめる
神をほめたたえよ
とこしえにたたえよ

31 レシタティーヴ

アダム

神に感謝ささげて
務めを果たした
ついておいで 私の妻よ
あなたを導こう
我が道は 奇跡と喜びに満ち
量り知れない神の恵みと
豊かな幸を いつも感謝して
神をたたえよう！

エ バ

あなたのために 私は生きる
あなたは私の命
神の定めに従えば
幸せと喜びあふれる

32 二重唱

アダム

やさしい妻よ！
共に過ごせば やさしい時は流れ
心なごみ 喜びあふれる
すべての悩みは消えゆく

エ バ

いとしい人よ！
共に過ごせば やさしい時は流れ

この命 この喜び
あなたの愛こそそのすべて
やさしい私の人
私のすべてはあなたのもの

アダム

露降りた朝は なんとさわやか！

エ バ

涼しい夕べは なんとさわやか！

アダム

元気取り戻すうれた木々の実

エ バ

香りあまい愛らしい花

アダム・エバ

でも あなたがいなければ
何になるう？

アダム

朝露も

エ バ

夕風も

アダム

木の实も

エ バ

野の花も

アダム・エバ

あなたと共にいてこそ
喜び満ちあふれる
私のすべて
あなたにささげよう
すべての愛をささげよう
あなたに この命を 愛を！

33 レシタティーヴ

ウリエル

幸せ満ちる二人よ！
知恵と欲や 必要以上のことを
知ろうとしなければ
人類は とわに栄えよう

34 合唱と四重唱

歌え みな共に！
たたえよ 神の業を！
祝え 主の誉れ！
響かせよ その名を！
たたえよ 偉大な神
歌えよ 共に
アーメン！

ハイドン作曲 オラトリオ「天地創造」の話

はじめに神、天地を創りたまえり……………

神光あれといたまいければ光ありき

神光をよしとみたまえり

これは人類の歴史のはじまりを語るキリスト教の旧約聖書の「創世記」の最初のことばである。天と地のすべてのものは宇宙の支配者であるただひとりの神によって造られたということ、神の造ったものはすべてよかったということ、人間は神の創造物の中で最高のものであったことなどが、この「創世記」の第一章と第二章には美しく記されている。

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン(1732~1809)のオラトリオ「天地創造」が、この旧約の物語を題材としているというまでもない。ハイドンが「天地創造」を完成したのは1798年、すでに66才になってからのことである。

これより先きハイドンは30年間仕えたハンガリーの貴族エステルハーツイ家の楽長を辞してから、1790年から95年にかけて2回にわたってロンドンを訪問して、この地で親しくヘンデルのオラトリオに接する機会を得た。この渡英はボン生れのヴァイオリニストで、1781年からロンドンに定住して音楽会の計画や世話をしていたヨハン・ピーター・ザロモン(1745~1816)の招きによるもので、ハイドンはこのロンドン滞在中に「驚愕」「軍隊」「時計」「太鼓連打」「ロンドン」などの題名で知られた「ザロモン・セット」と呼ばれる12曲の交響曲を作曲した。その音楽の親しまれているのも平和でユーモアがあり、芸術味にあふれているからであろう。

ハイドンの最初の渡英のとき、1791年の5月23日、26日、28日、そして6月1日の4回にわたってロンドンで、ヘンデル祭が催された。1000人のコーラスと管弦楽団によって、ヘ

ンデルのオラトリオ「エジプトにおけるイスラエル人」「メサイア」「サウル」その他が演奏された。ハイドンはその美しく壮大な音楽にひじょうな感銘を受けた。ことに「メサイア」をきいたときには感動のあまり、「ヘンデルこそ最大の作曲家である」と絶賛したということである。そして自らも残る余生をオラトリオの作曲に専念しようと決心したという。

ハイドンはそれから1792年に1度ウィーンに帰り、1794年にふたたびロンドンを訪れたが、このときにザロモンはハイドンにオラトリオを作曲したらどうかとすすめて、イギリスの詩人リドレイが書いた「天地創造」の台本を手渡した。この台本は旧約聖書の「創世記」とミルトンの「失樂園」をもとに、もともとヘンデルのために書かれたものであったが、ヘンデルはこれには作曲しなかった。ハイドンは台本を持ち帰ると、貴族でウィーンの図書館員でもあったゴットフリート・ファン・シュヴィーテン男爵に見せ、男爵の手で英語からドイツ語に訳され、短縮されて、こんにちの台本が作られた。

敬虔なカトリックの信徒であったハイドンはオラトリオ「天地創造」を作曲中、「このときほど神を敬う気持を強くしたことはなかった。毎日、この曲が無事に完成するようにひざまずいて神の加護を祈った」と友人に語ったと伝えられる。ハイドンはこの曲の作曲に3年の歳月を費している。

初演は完成の年、1798年の4月29日と30日、ウィーンのシヴァルツェンベルク宮殿で開かれた私的な演奏会で行われた。そして一般公開は翌1799年3月19日ブルク劇場で行われた。いずれも好評で、成功をおさめたのである。その後「天地創造」はロンドン、リスボン、ペテルブルク、パリなど、各国で演奏された。パリでは、ナポレオンが「天地創造」を

ききに歌劇場へ出かけたばかりに爆発の難を危く免れることができたという逸話さえ残っている。

また1801年にボヘミアのある教会のオツクルというハイドンをたいへん尊敬していた牧師が自分の教会で「天地創造」の演奏をしようと計画して、プラハの監督法院の許可を求めたところ、不許可になった。当時の頑迷な宗教家たちには、聖書にもとづく神聖な主題を舞台で演ずることは、神を冒瀆するものであると考えられたのであろう。このときハイドンは、「天地創造」の音楽はどんな説教よりもはるかに強く創造主をあがめ、尊ぶ気持ちをおこさせるたすけになると、監督法院に確言している。

1808年3月27日、ハイドンの76才の誕生を祝う音楽会が大学で開かれ、サリエリの指揮で「天地創造」が演奏されたときのことである。高齢のハイドンはひじ掛け椅子にかけたまま会場に入った。聴衆は熱狂的な拍手で彼を迎えた。演奏が進むにつれてハイドンははげしい興奮をおぼえ、第一部の終曲、有名な合唱曲「天は神の栄光を語り、大空は神の奇しき御業を示す」の劇的な歌が最強奏で鳴りわたったとき、感極まって、急に立ちあがり、天を指しながら、「光はかなたより」と叫んだという。これは有名な逸話である。聴衆は、このあと万才を叫び、彼に握手を求めて、まわりに押しよせた。ハイドンは聴衆の祝福に感謝して、演奏会場を去った。

翌1809年5月、フランス軍隊がウィーンに侵入してきたがハイドンを崇拝していたナポレオン軍の一士官が折から病床にあったハイドンを訪れ、その尊敬の意志表示として、「天地創造」の中のウリエルの歌、「神はその姿に似せて人を創りたまえり」を歌った。オーストリアにとっては敵であり、

彼にとっては礼賛者であるこの士官との心のふれあいにハイドンは強く感動したという。その後急に衰弱が加わり、5月31日、77才でこの世を去った。病床に起きあがりピアノのところへつれて行かれて自作のオーストリア国歌をくり返し弾いたというのは、死の数日前のことである。

「天地創造」の構成は三部34曲で、天使ガブリエルとエバ（ソプラノ）、天使ウリエル（テノール）、天使ラファエルとアダム（バス）、四部合唱と管弦楽から成る。物語の筋を聖書のことばを借りて記せば、第一部は天地創造の第一日、「はじめに神天地を創りたまえり」「神光あれといいたまひければ光ありき」「神光と暗を分ちたまえり」からはじまり、第二日「神大空を作りて、大空の下の水と大空の上の水とを分ちたまえり」、第三日「神いいたまひけるは天の下の水は一処に集まりて乾ける土あらわるべし」「神乾ける土を地と名づけ、水の集まれるを海と名づけたまえり」「神いいたまひけるは地は青草と種を生ずる草と……果を結ぶ樹をいだすべし」、そして第四日「神いいたまひけるは天の大空に光ありて昼と夜とを分ち……」とうたい、「天は神の栄光を語り、大空は神の奇しき御業を示す」と讃美して結ばれる。第二部は創造の第五日「神いいたまひけるは水には生きもののさわに生じ、鳥は天の大空の面に地の上に飛ぶべし」、そして第六日「地は生物を出し、家畜と昆虫と地の獣を出すべし」と、いずれも三人の天使ガブリエル、ウリエル、ラファエルによってかわるがわる物語られる。第三部はアダムとエバの樂園の物語で、最後に合唱と重唱で「すべての声は主を讃え、主の御業に感謝せよ、主の栄光は永遠なり」と神の恵みがうたわれるのである。

全ての民族は、この世の初めについて語る神話を持っています。聖書も同じです。ニネベのアシュルパニパル王の遺跡から発掘された楔形文字の碑文によって、バビロン人の創造神話が明らかにされましたが、確かにその類似性が認められます。また日本の神話——古事記も同様です。

聖書の物語はユダヤ民族のものであり、また、マホメット教徒の聖典でもあります。ですから、キリスト教ではこれをどう見ているかが問題です。日本の古事記では神と人との区別がありません。全く違う点です。神観・人生観をとらえて考えてみましょう。

初めが始まるところを人間は知りません。ただ、初めについて問うのであって、深い思考の情熱が、物語らせるのです。窮極の初めを知らない人間は、同様に、真の意味での終りについても語ることは出来ません。人間は失われた初めと終りの中間で思考し、行動しているのです。初めと終りとを知らない不安——罪——にある者の姿とは、キリスト教の実存的思考の構造であると申せましょう。

天地創造は、無に問いかけ、無からの創造を賛美します。知らされるのは、憐みであり、恩寵であり、赦しであり、慰めであります。それですから、天地創造の物語りは、思考の作品として吟味されるもの、つまり、科学されるものではありません。問うこと、応ずることによって、体験的に「参加する物語り」です。その点、合唱団によるコーラスは、物語りに最も近接した姿勢であると言えるでしょう。

天地創造の物語りは、旧約聖書の創世記第一章にあります。天地創造の第一日は、「姿なく、漂う、やみ」に向って存在の意識を唱います。そこには光があり、もはや創造に非存在が許されなくなります。夜と昼とがあり、夕と朝が、つ

まり、第一部では存在のリズムが唱われます。

第二部では、法則と秩序、摂理によって存在が持続し、創られたものが固定して来ます。創造の拘束から離脱して、彼等の存在の自立、自治が誕生します。創造の中で、創られたものが自からの生成に参加したのです。このことは天地創造のリズムに対し、大きな変化であり、創造に対し、生成の応答であると考えられます。つまり、応答のある創造となったので、天使の賛美する合唱により表現されます。

第三部は、人間の誕生です。男と女の創造は、愛を基調とした関わりのリズムとして、創造に新しい構造が与えられました。神の像に似て創られた人間は、自主的に、自由な自己の責任において、創造に問いかけを持つのであります。そして、賛美と、礼拝と言う形で、人間は創造に連がりを持ったのです。神の創造の拘束の中で、中間の場所で、自由と、関わりとで、人間は実存への呼びかけを持ち、そして創造に問い、創造に答える形で賛美を持つところに、キリスト教の信仰があります。

第三部の31以下は、創世記第三章の楽園物語りに由来します。「知恵と欲や、必要以上のことを知ろうとしなければ、人類は永久に栄えよう」と、コーラスは歌います。このリズムを破ってくるものは、「それを喰べると、貴方の目は開け、神のように善悪を知る者となるだろう」と言った蛇の言葉です。人間が神のようになる、そのことが創造の破壊を意味するものです。

「これを取って喰べるな、死んではいけないから」と神様は言う。「貴方は決して死ぬことはないでしょう」と蛇は言う。アダムとエバは木の実を取って喰べました。神様の約束に間違いなければ、死が人間の創造に入ったのです。しかし

蛇の言ったように人間は死にませんでした。つまり、人間は神様の言った死を生きているのです。「顔に汗して、ちりに帰る」の、のろわれた創造となりました。私達が一般に言う死は、ちりに帰る救いなき死で、神様の言った死を、人間的にもう一度死ぬことです。のろわれた創造、救いなき創造、そこにキリストを待望する旧約後期の信仰が生まれます。この失楽園の意味を背景に33をお聞きになれば、一層面白く聞かれるでしょう。

「鯨」のメンバーが非常に意欲的に「天地創造」などのオラトリオの現代日本語版に取り組んでいることは、全く素晴らしいことだと思います。宗教音楽だから信仰が無ければと考えるのは、キリスト教を全く理解していない人の言葉です。人間を唱うのです。人間の実存にふれて唱うことにより、失われた初めと、終りについて問うことが出来ます。

キリスト教を信仰する私の立場から言えば、この合唱全体の赴くところ、天地創造の神の御業を賛えるアレルヤでありましょう。ヘンデルの「救世主」が、アーメン・コーラスを持って終るのに対し、「天地創造」は、むしろアレルヤに強調があると思うのです。アレルヤは、ヘブル語で「主を賛美せよ」の意味です。全体の基調が「祝う」「喜び」の形になっています。

失楽園以前の創造は、無条件の賛美、新生の喜びであります。やがてくる人間の墮罪、そして「被造物全体が、今に至るまで共にうめき、共に産みの苦しみを続ける」ことから、「実に切なる思いで神の子たちの出現を待ち望み……滅びのなわめから解放され、栄光の自由に入る望みを」（ロマ書八章）キリストに確信するのです。「救世主」では当然この確信の表現として、アーメンが基調になるでしょう。アーメン

の語義は、「宣誓する」「是認する」であります。自由と責任を持って創られた人間は、うめきの創造から自主的に、自からの意志で脱出し、キリストに、第二の創造に、新しきアダムに応答しなければなりません。一括自動救済でなく、自由と責任に於いて応答する「確かにその通りです」と言うのがアーメンであります。アレルヤが祝祭の喜びの基調であるのに対し、アーメンは、信仰、祈りの確証として、ヘンデルの二つの合唱にそれぞれの特徴があると思います。

限られた中で、天地創造の順を追って来ましたが、私達の生活に還元して考えてみましょう。過密化した都市の公害の中で人間の作った文明に少し飽きがきたこの頃です。自然侵略を神の創造への反逆とは言わないまでも、反省してみたい気持です。人間の生産生活の中で、創造との関わりの回復を考えなければならないでしょう。今回の「鯨」の発表会は、多くの人によって準備され、集められ、組み立てられた、所謂、努力によって作られたものです。しかし今夕、合唱が高なるとき、作ったものを超える創造がそこにあるのに気がつくでしょう。家庭生活でもそうです。台所で働くもの、サラリーを持ち帰るもの、イタズラする者、そう言う人が集って懸命に生きるとき、それはもはや集合により集計された家庭でなく、涙が笑いに、苦しみが喜びに、困難、不可能を乗り越え、許せないものが許せる創造が家庭にあります。おそらく、この合唱に参加された方々は、作ったもの以上の何かにふれられていると思います。キリスト教は愛と言う言葉で簡単に表わしますが、その解釈はとにかくそれに近い何らかの体験を聴衆を含めた全員に、それぞれの思いで感じとれたと思います。「天地創造」の音楽会だけにうれしく思うのです。御盛會を祈っています。



先日、アメリカ旅行から帰って来た友人の話の中で面白かったのは、例えば、ニューオリンズの街を歩いていて、酒場から聞えてくるジャズ演奏を聞いて、騒々しい演奏だなどと思うと必ず白人のジャズだったり、英国人が、アメリカという国は英語の通じない国です、と嘆いていた話などで、まだ行ったことのない国ですけど大変興味のある話を聞きました。

ある時、デザイナーと話をしていて、アメリカという国はオリジナリティのある国だということになり、その要因は何処にあるのだろうかということから、伝統の無い国だからではないかという結論になりました。しかし、音楽にしてもデザインにしても、大変オリジナリティがあるにもかかわらず発展したりしないのは、それがすぐ風俗になり、商品化され一般的になってしまう所があるからの様です。

アメリカでクシャミをすればすぐ風邪を引く国民の一人と

して、アメリカ帰りの話など聞いていると何でも面白く思えます。アメリカという国は、人類が作った最後の国、という印象がとても強く感じられるからです。もともとは大自然の豊かな実りのある大地を、次から次へと破壊して、人工の都市に作りかえていった国ではないかと思えます。

神が、天地を創り、自然を創り、生物を創り、最後に人間を創ったという聖書の話は、日本の古事記の話に大変よく似ているのですが、いずれにしても、神々はいつも最後に人間を創っています。そのせいでしょうかは判りませんが、人間はこの世に出現して以来、いつも、自然を破壊したり、生物をすべて我が物にし、この世の造成主である神々に反抗して来たのではないのでしょうか。

今はやりのゲバ行為は、すでにアダムとイヴの時代にまでさかのぼる行為だと考えられます。神が人間に与えたパラダ



イスを追われる破目になったのも、アダムとイヴが神という体制側に反抗した結果だったのでしょうか。

人類は、ついにこの地球という大地をさえ気にいらなくなり、ロケットで宇宙にまで飛びだして行きました。はたしてこの地球が人類にとって最後の樂園であったかどうかは疑問ですが、果てしない宇宙という空間の中をロケットは、アダムとイヴが樂園を追われたように飛びたっていったのです。その行為は、ドンキホーテであるかも知れないし、ソングウの様に、行きついた先が菩薩の手の中だったりするかも知れません。

しかし、何千年という長い間、人類がここまで生きぬいて来たエネルギーの源は、この体制の中に甘んじて、ぬくぬくと、また、過保護の中で生きることを嫌って、反体制に飛びだして行ったことにあるのではないのでしょうか。神々の与え

給うたこの天地に対して造反して来た人類の知恵と欲望が、現代の我々の生につながって来ているのではないのでしょうか。

今度、（上演というか、演奏されると申しますか）ハイドンのオラトリオ「天地創造」の最後のレシタティーヴで、「……必要以上のことを知ろうとしなければ、人類は永久に栄えよう」（合唱団 鯨訳）と訳されている所がありますが人間の知恵と欲望という造反行為が、人類を破滅に向かわせているのかどうかは判りませんが、少なくともその行為があったため、人類はこの地上に実存して来たし、また、実存していることに間違いがないと思います。我々の祖先であるアダムとイヴに幸いあらんことを祈りましょう。

（写真は「メサイア」のステージ 1969.12.21）

芥川也寸志の指導する合唱団鯨は、昭和42年12月に結成された。第1回の演奏会当時を振り返ると、よくぞこのような大ホールで演奏会を、と思われるような初心者の集まりで、正直のところ批評にとり上げるに当っても、新しい合唱団の門出を傷つけぬためには、かなり気をつかわねばならなかった。ところがどうだろう。ハイドンのオラトリオ「四季」をとりあげた今回（昭和44年5月28日、於日比谷公会堂）この大曲を、立派に唱いこなす大合唱団に見事変身しているのではないか。

更に注目されたのは、このオーソドックスなオラトリオを、極めて平易な日本語で唱ったこと。聖歌隊のローブともロシアの民族服ともつかぬ揃いのマントを着用し、照明・朗読・踊りなどを交えた新しい演出を試みたことであった。

広く誰にでも楽しめるように、という意図によるものだろうが、少なくとも今日の時点では、この新しいとりあげ方はさぞかし物議をかもしうことであろう。

筆者自身に関する限りは、全般的に割合に抵抗なく聴くことができた。なぜならば、曲自体が素直に、ハイドンらしく明るく唱われていたからであり、視覚はそれとは別に美しい照明のうつりかわりを楽しむことができたからである。

但し部分的には少なからぬ異和感も覚えた。例えば曲の合

間の朗読、「秋は樽から溢れ出る葡萄酒のようなもの」という様な文学的表現が、自分のこの曲へのイメージと一致しなかったのである。またパントマイムは何か遠慮がちで、中途半端だという印象を受けた。

何れにせよ曲自体のもつ味わいに、何かを加えることによって、別の印象を創り出すことの是非が新しい試みについての問題の焦点になるであろうことは疑いない。難しく言えば再現芸術の目的と限界、或いは芸術の再創造という問題に連なることになる。しかし世間には、文学作品の脚本化・映画化のような事例もあることで、なかには時代を全く転換するような試みも珍らしくはない。純音楽の分野に於てあまり先例がないというだけのことである。要は原作の高い芸術性を十分に活かした立派な演奏、演出であるか、そして聴衆や演奏者自身に飲びをもらすものであったかどうかということで、評価も自ずから決まることとなる。

この合唱団は何れにせよ新しい方向を模索するのが使命なのであろうし、やるならおよび腰でなく、徹底的になんでも試みるがよい。そして世の先駆者ならんと志すもよし、捨て石となるも宿命で、それを怖れるべきではなからう。

（合唱サークル '69年7月号より 抜粋・加筆）

合唱団鯨による「四季」について考える

文化や伝統のサイクルまでもが、加速度的に変化している現在、アマチュア合唱団の歴史も10数年来、予期せぬ独自の道を歩んできている。

最近になって、アマチュア合唱界も、歌う会から、聞かせる合唱へと積極的に分岐を試みているけれども、その中で、昨年春、鯨の「四季」を聞いて、私は何か「オヤッ」と思うものを感じた。それは先取主義者の小気味良さの様なものである。とにかくオラトリオ形式にパントマイムを持ち込むことは、文学がさし絵により、より具象化する事の是非に似てはいるが、私の考えるアマチュア合唱の音楽性なり芸術価値は、高度に磨かれた技術よりむしろ、個人のかかわり合いの中から生れてくる音であると思うので、私にとってそれは必ずしも必要でなかったのかも知れない。

しかしこの試みのもつ意味はオラトリオの概念になかったものをあえて行うという時点で、とらえねばならないと思う。

昨年暮のメサイア（ヘンデル）、そして今回の天地創造と続けて、これらの大作をステージにのせる事の困難さに加え、その中に可能性を見い出そうとする姿勢が「翻訳／合唱団鯨＋芥川也寸志」にも伺われる訳で、これらの事を合せ考えてゆくと、次第に合唱団鯨のもくろみが何であったのか理解出来、そして同時にそれは、今我々が直面しているモダンイズムとしてとらえることが出来るのである。（K.W.生）

——アンケートの一部より——

◆訳詩について

- ◎原語で聴くより、一層内容の把握ができて、曲にひきつけられた。
- ◎まとまっていて、わかりやすく楽しい。
- わかりやすいが、宗教色の濃い所は、安っぽく、聴こえる。
- 不自然だ。…… a メロディに合わない
b 声楽的に無理
- 意味はわからなくても、原語の方が音楽的。

◆演出について

- ◎ライトの演出がよかった。
- ◎新しい試みとして高く評価したい。
- ◎一つ一つの動作の意味がわかり、よかった。
- ◎漸新的でおもしろく、見るものを飽きさせない。
- 動作により、音楽が中断された。
- ハイドンに悪いよ。音楽は聞くものでなければ。
- 中途半端な感じがした。
- パントマイムはない方がよいものが多かった。

<天地創造>に於いても、新形式を試みました。合唱団鯨がより向上するために、また、厳しいご批判を頂きたいと思いません。

3年前のクリスマス・イヴに芥川先生を中心にわずか20名程で発足した“鯨”も、現在200名近い団員を数える合唱団に成長し、そしてまた、創立当初よりの一つの目標であった3大オラトリオの演奏も、昨年5月に「四季」、12月には「メサイア」と公演を行い、本日の「天地創造」の演奏会でその実現をみましたことは、私たちの大きな喜びであると共に、これでようやく“鯨”もその歴史の1ページを刻み込んだような気がいたします。

御存知かと思いますが、この合唱団は入団に際しては何らの制限も設けておりません。強いてあげれば音楽の好きな方とでも申せましょうか。従って鯨は実に様々な人々の集まりであり、一人一人が異った社会生活を営み、その思想や主義主張、考え方も様々です。丁度そこには、我々の社会を縮小したような小さな社会があります。そのような中で個々のメンバーが合唱というものを通じて、“音楽を愛する”という心のもとに自己のひたむきな情熱を自分の声に託して歌いあげる——この一瞬にサラリーマンが、O.Lが、学生が、主婦が、一人の音楽家に変身して、音楽創造にその内なる総てのものをぶつけていく——ここにアマチュアコーラス“鯨”の感動の源があります。そしてそれらの異なる要素が一つのハーモニーとして融けあい音楽が創造された時、私たちは社会生活において忘れかけている自分というものを取り戻し、生あるもの、人間としての感動を覚えるのです。そしてこの感動は私たちだけでなく、必らずや聴いて下さる皆様にも伝わり等しく分かち合えるものと信じております。これが“鯨”の心とでも言えるかと思えます。

一方、“鯨”はその頭の中で次のようなことを考えております。それは現在我々を取りまいてる社会の環境を、歌うということ、音楽するということを通じて少しでもより良いものにしていくということです。“生きる”ということをより素晴らしいものにしたい。それは我々の文化を高めるということに通じると考えていますが、そういう運動の担い手になりたいと願っております。そしてそのような活動の場を広げて行き、日本のあちこちに“鯨”が生れるとよいと思うのです。私たちが“鯨”の中の一人の音楽家となるにも色々な制約を伴います。仕事のこと、家庭のこと、友達、恋人のこと。それからお金や時間的制約、あるいは疲れ、無気力等々。それら種々の苦しみを超えた後に得た音楽的感動は、たとえばような大きな力を私たちに与えてくれます。そしてこの感動を一人でも多くの人と共に出来たら、それは一層素晴らしいものになります。鯨が運動体、演奏団体として活動することがこのような感動の体験の場を増やしていくことになり、更にはよりよい環境を創り出していく力となるものと信じております。

とは言っても“鯨”はまだまだ小さな、弱々しい“子鯨”です。その前途には色々な困難が待ち受けているはずですが。私たちはその困難に耐え、厳しい荒波を乗り越えていく覚悟でおります。そしていつの日か一頭の雄々しくたくましく成長した鯨となって、多くの子鯨と共に大海を狭しと泳ぎまわる時が来ると信じています。どうかその日までこの“鯨”を暖かく見守っていただきたく存じます。

次回演奏会予定

11月25日

カール・オルフ

カルミナ・ブラーナ

新響第九特別演奏会に出演

日比谷公会堂

12月20・21日

ベートーヴェン

第九交響曲

第九特別演奏会に出演

渋谷公会堂

共立講堂

鯨のあしあと

'68年7月3日

第1回定期演奏会

12月8日

ふぁみりい・こんさあと

12月23・26日

新響・鯨第九特別演奏会

'69年5月28日

オラトリオ「四季」

7月17日

コーラスとオーケストラの夕べ

12月21日

オラトリオ「メサイア」

'70年4月8日

鯨はるにうたう

訳詩メンバー

阿部慎一郎 板倉卓人 今野暁子 上田恵子 岡崎直子
岡崎比佐子 小谷都美子 庄司弘子 菅原照光 杉原奈保子
當麻美那子 高橋章夫 玉村節子 中川ふじよ 中沢
光王 長谷川貞子 蒔田良子 三浦澄子 水田義郎 森幸
一 吉野正美 和田美智子 渡辺直 渡辺富美恵

芥川也寸志

新入団員を募集します
毎週火曜に渋谷のカワ
イ楽器で練習してます
後援会員も募集します
依頼演奏を受付けます
お問い合わせは下記へ

合唱団鯨事務所

東京都新宿区須賀町14大湊ビル

Tel. 357-5255 (12時~18時)

表紙デザイン 原田維夫

衣裳製作 大井昌子

衣裳製作協力 京都衣裳KK

プログラムメンバー

岡崎比佐子 阿部節子 板倉卓人 野村ミワ 望月孝 森幸一

万葉'70世界バイキング大会

食べ放題飲み放題

1名様 ¥1,700 税込1,870

西洋料理 日本料理 中国料理

生ビール・コーラジュース

毎夕5時半より9時半まで

宴会にご利用されるときは

便利な前売券がございます

お問合せ ☎(461) 1122

渋谷駅前・西武百貨店隣り

結婚式場・各種パーティ宴会場



万葉会館

純喫茶

みなさまのいこいの場!!

しぶや **でんえん**

団体予約受付ます

渋谷区宇田川町25～2

TEL 461-5909
-5036

新刊のご案内

福永陽一郎合唱曲選集1

黒人霊歌 (男声合唱曲)

B-5判 52ページ ¥170

福永陽一郎合唱曲選集2

古典イタリア歌曲 (男声合唱曲)

B-5判 44ページ ¥200

諸井昭二 編

黒人霊歌 (混声合唱曲)

B-5判 56ページ ¥250

どじょうこの会 編

岡本敏明作品集

B-5判 80ページ ¥300

西崎嘉太郎／寺西秀夫／佐々木恵美子 共編

こどものリーダーシャッツ

A-5判 48ページ ¥200

高江州義寛 編

沖縄のわらべうた

B-6判 48ページ ¥200

高江州義寛 編

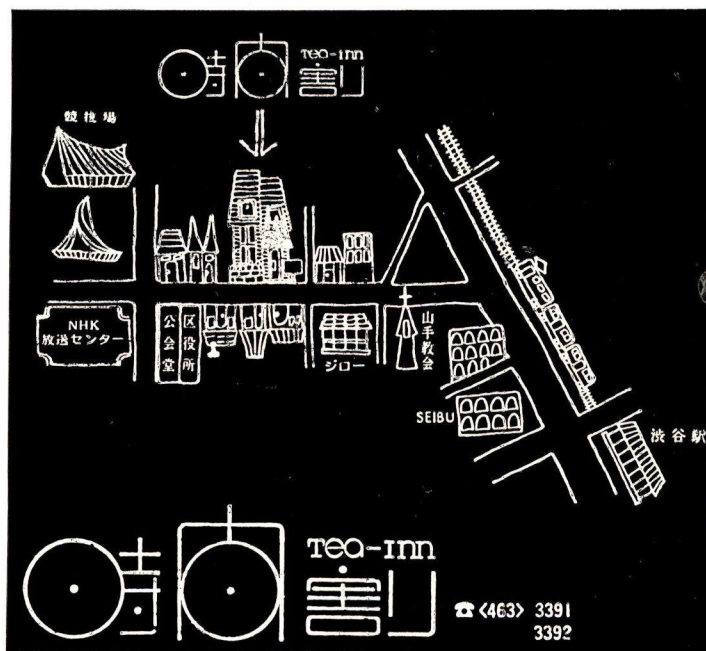
沖縄民謡合唱曲集

B-5判 60ページ ¥350

*有名楽器店にて発売中
品切れの際は発行所にお申込下さい。

楽譜印刷／出版／企画デザイン

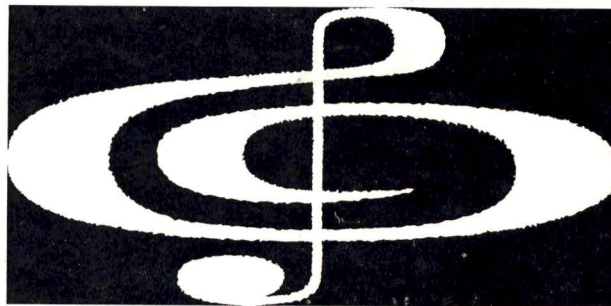
HOTTA | ホッタガク 東京都 新宿区 戸山町 43の3
Tel 202-1661 振替口座東京48623



店飯塚写真店・飯塚写真店・飯塚写真店・飯塚写真店・飯塚写真店

日本楽器渋谷店 渋谷・道玄坂2-10-7
463-4211(代)

より豊かに より楽しく —



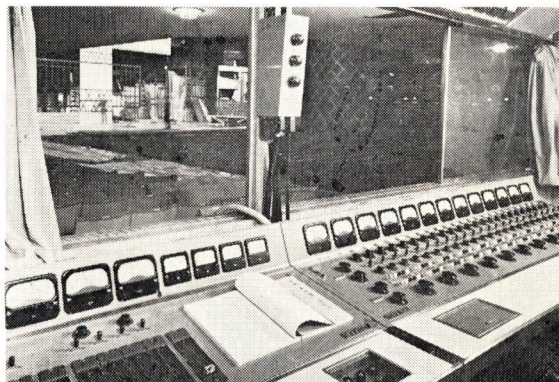
モービル石油は、急増するわが国のエネルギー需要にこたえ、すべての人びとが豊かなくらしを楽しむ輝かしい未来に、挑戦いたします。

Mobil
モービル石油

HYFAX

ホール音響装置

プロフェッショナル音響装置の専門メーカーです



東京地区の代表的な納入先

- 東京厚生年金会館
- 明治座
- 日生劇場
- 朝日生命ホール
- イイノホール
- 日仏会館ホール

←ホール音響調整室

不二音響株式会社

本社 港区西新橋2丁目5-10 TEL501-3161



EXPO'70

4-P1-2

ペプシ館であいましょう

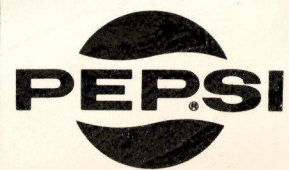


ペプシ館



ペプシがなければ はじまらない!!

コーラはペプシ



音楽と詩と光の中へ

思わず**プツ**と吹き出したくなる
結婚式はすでに過去のもの……

お2人の新しい人生のスタートは
厳粛で、祝福と感動につつまれた
結婚式場をお選び下さい。



音楽結婚式

ウエディングホール

地下鉄銀座線神宮前駅下車10秒 TEL (409) 3591~5